

## 浄土寺・東山殿から銀閣寺へ

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



中門の調査で検出した東山殿の石列(右上の大きい3個)と浄土寺の石積みと溝(その下)

銀閣寺には銀閣(観音殿)や東求堂くどうがあって、北山の金閣寺と並んで修学旅行生や海外からの観光客で連日賑わっています。銀閣寺というのは、観音殿を北山の金閣と対比して呼ぶ「銀閣」に因んだ呼び名で、正式には「慈照寺」といい、臨済宗相国寺の末寺に列せられています。

室町幕府八代将軍を退いた足利義政は、自身の隠棲のための山荘の建設地を探していました。ようやく応仁の乱(1467~77年)のおさまった文明十四年(1482)1月、

もと浄土寺があったという如意ヶ岳の麓にその場所を定め、「東山殿」の造営にかかります。義政は次々と堂宇を建設していきます。観音殿(銀閣)の上棟は最も遅く長享三年(1489)3月になされましたが、義政は延徳二年(1490)1月、完成した銀閣を見ることなく、亡くなってしまいます。その遺言にしたがって、東山殿は寺院に改められ、「慈照寺」となります。

さて、今回老朽化した中門の解体・新築工事と、参道を挟んだ西

側に新たにトイレ・売店の建設が計画され、平成15年3月より事前の発掘調査を行ないました。

中門の調査では、解体された中門(薬医門)が江戸時代後期頃に



銀閣寺境内図と調査地点

造られたものであること、それに先行する江戸時代初期の門の礎石跡を見つけ、それが棟門という形式のものであることがわかりました。その下層では、義政が東山殿を造営したころと思われる、北で西に15度ほど振れる南北方向の西向きの石列が見つかりました。さらに一部を深く掘ってみたところ、その下にはほぼ重なるように石を2～3石分（高さ40cm）積んだ石積遺構と溝があることがわかりました。この石積遺構と溝の石組みは西に面をもっていて、義政の東山殿の造営よりも前の平安時代後期頃のものともみられます。

参道を挟んだ西側の調査では、幅1.2mの東西方向の石敷遺構が見つかりました。この地は西へ低い傾斜地で、さらに西側は断崖状に3mほど低くなっています。遺構は平坦な石の上面を揃えて路状に設え、地形に沿うように緩やかに東から西へ下がるように造られていました。この石敷も義政の頃に造られたものでしょう。

これまでにも、慈照寺の境内では何度か発掘調査が行なわれており、平成5年（1993）の調査（リーフレット京都No.86 参照）でも、義政の頃に造られた石垣をとまなう溝や石製の導水施設、暗渠などが見つっています。今回、中門部分で発見した南北方向の石列や西側の路状石敷も、東山殿造営時の遺構です。

今回の調査で新たにわかったのは、これらの遺構が、現存している境内の建物や施設とは異なる方向に規制されていたのではないか

ということです。東山殿よりも古い、中門で見つかった平安時代後期の石積遺構は、初めて確認された浄土寺に関連する遺構と考えられますが、これも北15度西の方向を示しています。平安時代の浄土寺、室町時代の東山殿の造営のころには、このあたりに今とは違う北15度西の古い地割があったことがわかりました。

東求堂と観音堂（銀閣）は創建当時のものが残っていると言われていますが、少なくとも東求堂は元あった位置から今の場所へ曳き屋されたことが、解体修理のとき

の調査でわかっています。もしかすると、東求堂も銀閣も創建当時は今と違う方向を向いていたかも知れません。（高橋 潔）

浄土寺 詳細は不明だが、『日本紀略』寛和二年（986）に「浄土寺」がみられることから、少なくとも10世紀ごろには成立していたと考えられている。宝徳元年（1449）護摩堂より出火し、主だった建物を焼失してしまい（『康富記』宝徳元年六月廿二日）東山殿造営にあたって移転を余儀なくされた。現在慈照寺門前北にある浄土院を残して、相国寺の西に移建した。



西側の調査で見つかった石敷き